

27B-pm06

リウマチ治療における肝機能増悪リスクの薬剤疫学的検討

○木村 恭輔¹, 赤沢 学¹ (1明治薬大)

【目的】関節リウマチ(以下、RA)は、長期的にわたる薬物治療が必要なため、副作用や医療費負担が問題視されている。特に近年、薬剤性肝障害やB型肝炎の再活性化が注意喚起されている。しかし、RAと肝機能障害に注目した定量的な報告は少ない。本研究では、RA治療薬と肝機能障害の関係を検討することを目的とした。

【方法】(株)日本医療データセンターが保有するレセプトデータより、2005年1月から2013年6月にRA疾病分類コードを持つ患者情報を取得した。そのうち、6か月以上継続してRA確定診断があり、RA確定診断後にRA治療薬(NSAIDs・ステロイド・DMARDs)の処方がある患者を対象とした。また、肝機能検査により確定診断が得られる場合を肝機能障害の発症とした。肝機能障害の内訳、治療継続の有無を集計した。

【結果】本研究のRA患者数は8015名であった。そのうち、肝機能障害を発症した患者数は1378名(17.2%)であった。肝機能障害の内訳は、肝疾患1103名(80.0%)、ウイルス肝炎259名(18.8%)、肝機能検査の異常所見10名(0.7%)、肝癌6名(0.4%)であった。肝疾患で死亡2名と治療中止14名、ウイルス肝炎で治療中止8名がみられた。RA治療薬と関係があると考えられる薬剤性肝障害とB型肝炎の再活性化については、各々、中毒性肝障害39名(2.8%)、急性B型肝炎108名(7.8%)であった。

【考察】レセプトデータを用いて、RA治療薬と肝機能障害の関係について検討することができた。今後は薬剤との関係を含めた肝機能障害の詳細な検討を行う。